

# 陶淵明における貧窮の意味

上田 武

一

帰田後の陶淵明の詩文の主要な題材としては、田園の隱逸生活とそれに伴う飲酒のたのしみがあり、またその底によこたわる死への心の波立ちがあげられるが、生活の貧しさに對する感慨も、作品の構成要素として大きな部分を占めている。淵明の百三十五篇の詩文において、隱逸生活の靜謐さを肯定的にうたった作品は約四分の一、酒については実に半数、生と死を取りあげたものが四分の一、そして貧窮の問題に触れたものはやはり四分の一に達している。淵明の作品において、貧窮に関する題材がこのように大きな比重を占めていることは、当然かつ自明の事柄として、これまでほとんど検討される機会がなかったが、そこには彼の文学の本質をとらえるうえで、見過ごすことのできぬ問題が存在しているように思われる。

貧しさについて触れた淵明の詩文の具体的特徴について

は後で述べるが、最初に指摘しておかなければならないことは、その多くが彼自身の実生活と何らかの程度にかかわりを持つものとして語られていることであり、しかも文学の次元においてそのように生活に根ざして貧窮を表現することは、当時にあつては極めて稀有なところみであつたという点である。

貧困ということは、人類にとつてその發生から現在にいたるまでの根本的な課題であり、人類の歴史はまさに貧困をいかに解決するかをめぐつて、紆余曲折の道をたどり続けてきた過程にほかならないということが出来る。ところが淵明以前の中国文学、とりわけ韻文においては、この人間生活の根幹にかかわる貧困の体験を主題とする作品は極めて僅かしか存在しない。詩に限つて見た場合、『詩經』においては、部分的にでも生活の貧しさについて触れた作品として、邶風の「谷風」「北門」、衛風の「氓」、王風「中谷有蓷」、魏風「碩鼠」、小雅「蓼莪」などを挙げてゆくこ

とができる。しかし前後漢では辛うじて古詩十九首其四が目にとまるだけである。また三国魏では曹操、曹植、阮瑀、阮籍、嵇康に貧窮に触れた作品が若干あるが、それらはいずれも淵明の場合とはちがって、実生活とはかかわりのない比喩的観念的な表現である。貧窮そのものを主題とした当時の詩としては、文帝曹丕の「上留田行」と応璩なる人物の「雜詩」の二つがあげられるが、いずれも樂府としての表現のおもしろさや、題材の特異性などに重きを置いた遊戯的なところの粹を出るものではない。更に晋に入っても、貧窮をうたった詩を探しあてることが容易ではない。『芸文類聚』卷三十五の「貧」の部の詩の項には、淵明の「詠貧士」七首の其一、其四、江迥の「詠貧」、『全晋詩』に採録されぬ張望という人物の一首が見えるが、淵明のものを除くなら、それらが晋代の貧窮詩のすべてだと断定してもさしつかえない状況といえよう。なお「貧」という語を用いた詩は『全晋詩』中十七首見えるが、そのうち十首は淵明の作であり、江迥の「詠貧」を除いた傳玄らの六首は、やはりいずれも実生活とは無縁の観念的な表現である。<sup>(4)</sup>

ところで淵明の詩文では、貧困の窮まった状態として、

更に飢餓の苦しみが繰り返し訴えられている。戦乱や天災等の、個人の営為をこえた巨大な外圧によってもたらされる飢餓は、疫病と共に原始社会から人間存在を脅かす最大の関心事であったはずであるが、淵明以前にあっては、それを主題とする文学作品はやはり極めて乏しいのが実情である。『詩経』においてはそれでもやくざな官吏の横暴や、遠征あるいは天子の悪政に基づく動乱、更に日照りなどのさまざま原因による民衆の飢えの苦しみをうたった例を挙げることができる。<sup>(5)</sup> また時代が下がつて、曹操の「蒿里行」の「白骨は野に露され、千里鶏鳴なし」や、王粲の「七哀」詩の「門を出づるも見る所なく、白骨平原を蔽ふ路に飢ゑたる婦人有り、子を抱きて草間に棄つ」は、大規模な戦乱のもたらしたさまざまの荒廃の情景をまのあたりにしての絶唱として、人の心をとらえずにはおかぬ迫力を有するものである。しかし『詩経』と建安詩を結ぶ九百年の長い時の流れの中での、飢餓体験にまつわる詠唱は全くといってよいほど残されていないばかりでなく、それ以後の淵明に至る二百年にあつても、あるかなきかのまことに寥々たる状況である。『太平御覽』卷四八六の「飢」の項には、西晋の傳玄の「炎旱」詩が引用されているが、兩晋の間、淵明を除けば「飢え」を主題にした詩はこの一首に

尽きるものごとくである。なお『全晋詩』には「飢」という語が二十三首見えるが、うち十六首は淵明の作によって占められ、残る陸機らの七首は、貧の場合と同様、飢えを生活体験としてではなく、比喩的一般的な事例として扱おうにとどまる。また飢と同義の「餓」について見れば、四例中の三例は淵明の作である。

以上のように「貧」「飢」などのキー・ワードを手がかりとしながら、先秦から西晋に及ぶ悠遠な歴史の中で、前代及び同時代の文人たちの作品を対照してゆくことにより、人間存在の根幹を左右する貧窮と飢餓の問題に思いきって大量の題材を求めた淵明の詩文が、いかに時流に抜きん出た新しさを持つものであったかがはっきりと理解できるのである。

## 二

「貧」「飢」「餓」などの限られた用語だけでなく、それぞれの作品の内容に即して陶淵明の貧窮にかかわる詩文を眺めた場合、そこからいくつの特徴点を導き出すことができる。

その第一は貧窮の問題が農耕労働、彼自身の用語でいえ

ば「躬耕」と深くかかわるものとして語られていることである。義熙十二年（四一六）、五十二歳の作である「丙辰歳八月中、於下潁田舎穫」では、「貧居依稼穡、勸力東林隅——貧居 稼穡に依る 力を勸す東林の隅」、田畑の仕事が貧乏暮しの唯一の支えであると明言されるが、この詩や「祭従弟敬遠文」における、舟によって泊りがけで稲刈りに出かける情景の生き生きとした鮮明な描写は、その作業に実際に携った体験があつて始めて可能なものといえよう。淵明にとって、農耕労働は彼の生活全体を左右する核として意識されていたことは、後に触れる「自祭文」の自伝的記述からも明らかである。不作、凶作で飢えに迫られた時の、「怨詩楚調、示龐主簿・鄧治中」や「有会而作」の悲痛な嘆きについては別に検討したいが、基本的には淵明の内面における農作業の比重の大きさを前提にして理解されるべきものであろう。

貧窮に関する詩文の第二の特徴は、貧しさや飢えがみずからの体験にとどまらず、淵明の敬慕私淑する古人の体験としてうたわれていることである。いうまでもなく「飲酒」二十首と「詠貧士」七首にはほ集中する伯夷、叔齊、桀啓期等、貧窮生活の中にあつてみずからの理想と自由を貫いた十余人の古人は、淵明その人の分身として位置づけ

られる存在でもある。構成詩としての連作の機能を十二分に活用して、淵明は俗世の運命に背を向けて歩まねばならない隠士の生き方を、可能な限り多方面にわたって追究しようとしたと見ることができよう。

第三の特徴点は、貧窮と飢餓を素材としながら、繰り返し自身の生き方が問い直され、そのつど信念を貫こうという決意が表明されていることである。官僚として東奔西走の生活の中にあつた当時の淵明は、伝統的な「真」や「善」といった生活理念へのひたむきな志向をうたっているが（「始作鎮軍參軍、經曲阿作」「辛丑歲七月、赴仮還江陵、夜行塗口」など）、帰田以後の作品からはそれらの理念語が次第に影を潜め、代つて「固窮節」という気概が語られるようになってゆく。「固窮節」は周知のように『論語』衛靈公篇の「君子も固より窮す」という孔子の言葉に基づきながら、「貧窮の中にあつても節操を貫き通す」という独特の意味のこめられた言葉である。この気概は彭沢令に就任する以前の「癸卯歲十二月中作、与従弟敬遠」にはじめて見え、「飲酒」其二、「同」其十六、「有会而作」、「詠貧士」其七、「感士不遇賦」等を点綴してゆくが、六十歳前後の作と思われる「有会而作」において最も激越な響きを伝えるものとなっている。

特徴点の第四は、右の第三点と表裏一体の精神的いとなみといえるが、貧窮や飢餓を語ることを通して、みずからの生涯の回顧、総括が何度となくおこなわれていることである。すでに「与子儼等疏」においても「吾年過五十。少而窮苦、每以家弊、東西游走。性剛才拙、与物多忤。——我年五十を過ぐ。少くして窮苦、毎に家の弊せるを以て、東西に游走す。性剛にして才は拙、物と忤ふこと多し。」という回顧がなされているが、「飲酒」其十、其十六、其十九、「怨詩楚調」詩、「擬古」其八、「歲暮和張常侍」、「有会而作」と繰り返される中で、内容も次第に深まりを示している。最晩年期の「自祭文」には、引き締った美しい文章によって、二十余年間の隠逸生活に対する自伝的概括をこころみた部分がある。いわく、わが人生は「簞瓢屨蟿、絺綌冬陳。——簞瓢屨しば蟿き、絺綌を冬に陳ぬ」のような貧しさの連続であつた。しかしその貧窮生活を支えてくれたものこそ、たゆみない農耕作業にはかならなかつた。「含飲谷汲、行歌負薪。鬻鬻柴門、事我宵晨。——飲びを含みて谷に汲み、行歌しつつ薪を負ふ。鬻鬻たる柴門のうち、我が宵と晨に事む。」労働のかたわらに楽しむものは書物と琴。ともかくも自分は力の出し惜しみはしなかつた。だからこそ穏かな心の平衡を勝ち得ることができたのだ。

「勤靡余勞、心有常閑。——勤めて勞を余すこと靡ければ、心には常閑有り。」「自祭文」にはこのあと次の一節が続く。「嗟、我独邁、曾是異妓。寵非己榮、涅豈吾縉。掉兀窮廬、酣飲賦詩。——嗟、我独り邁ぎ、曾に妓れ（世の人びと）に異れり、寵は己れが榮には非ず。涅も豈に吾を縉めんや。窮廬に掉兀として、酣飲して詩を賦す。」世俗と妥協せず、あばら家で孤高を守り通すことを可能にしたものは、とりも直さず固窮の気概であったにちがいない。

「自祭文」は淵明が貧窮にかかわる詩文において、長年にわたって表白し続けてきたものろの内容を、鮮かに集約し尽しているといえよう。

貧窮をうたう淵明の詩文の内容的な特徴は以上の通りであるが、表現の面から眺めるならば、全体を貫くのは強いリアリティーである。たとえばすでに陶淵の『集注』に、寓意が事実にあつての蘇軾以来の論争が紹介され、日本においては淵明一流のフィクションだとするのが定説となっている「乞食」にしても、現在の中国では事実を述べたものだとする解釈がむしろ一般的であるのは、冒頭部を中心とした前半部分のイメージが極めて鮮明なためだと考えられる。それら諸作の中で、とりわけ迫真力に富むのは、

「怨詩整調」詩と「有会而作」の二作であらう。淵明の貧窮詩の典型という視点から、まず前者を取りあげてみた<sup>12)</sup>。

天道幽且遠 鬼神茫昧然 結髮念善事 僮俛六九年 弱冠逢世阻 始室喪其偏 炎火屢焚如 螟蟻恣中田 風雨縱橫至 收斂不盈廬 夏日長抱飢 寒夜無被眠 造夕思鷄鳴 及晨願鳥遷 在己何怨天 離憂悽目前 吁嗟身後名 於我若浮煙 慷慨独悲歌 鍾期信為賢 天道は幽かにして且つ遠く 鬼神は茫昧然たり 結髮より善事を念ひ 僮俛たり六九年 弱冠にして世の阻しきに逢ひ 始室にして其の偏を喪ふ 炎火屢しば焚如たり 螟蟻中田に恣にす 風雨縱横に至りて 收斂廬にも盈たず 夏日には長に飢多を抱き 寒夜には被無くして眠る 夕に造れば鷄鳴を思ひ 晨に及べば鳥の遷るを願ふ 己に在り何ぞ天を怨まん 離憂目前に悽し 吁嗟身後の名 我に於ては浮煙のごとし 慷慨して独り悲歌す 鍾期は信に賢なりと為す

貧窮の体験をうたいながら、自身の生涯を回顧する楽府体の詩であり、特に第二、三聯は淵明の伝記の基本資料と

して重要視されている。この詩のリアリティーの急所は第七聯にあり、飢餓体験のない者には思いもかけられないような迫真力に満ちている。第七聯の存在によって前半の伝記的部分はいよいよ確かさを増し、後半の詠懐は更に痛切さを深めているといえよう。とまれひたすらなる善事への努力にもかかわらず、挫折と貧苦と飢餓にさいなまれ続けた自分の五十四年の人生の真実を、理解してくれる者の誰一人としてないことへの痛恨が一篇の主題である。

次に「有会而作」を眺めてみたい。<sup>(13)</sup>

〈序〉旧穀既没、新穀未登。頗為老農、而值年災。日月尚悠、為患未已。登歲之功、既不可希、朝夕所資、煙火裁通。旬日以来、始念飢乏。歲云夕矣、慨然永懷。今我不述、後生何聞哉。——旧穀は既に没ぎ、新穀は未だ登らず。頗か老農と為りて、而も年災に値ふ。日月は尚ほ悠かにして、患を為すこと未だ已まず。登かなる歳の功は、既に希ふべからず、朝夕資む所、煙火裁かに通ずるのみ。旬日以来、始めて飢乏之しきさまを念る。歳云にたれんとするかな、慨然として永く懷ふ。今にして我述べざんば、後生何を聞かんや。

弱年逢家乏 老至更長飢 菽麥寒所羨 孰敢慕甘肥 怒  
如垂九飯 当暑厭寒衣 歲月將欲暮 如何辛苦悲 常善  
粥者心 深念蒙袂非 嗟來何足吝 徒没空自遺 斯濫豈  
攸志 固窮夙所歸 餒也已矣夫 在昔余多師——弱年よ  
り家の乏しきに逢ひ 老の至りて更に長に飢う 菽と麥  
とは実に羨む所 孰か敢へて甘く肥えたるを慕はんや  
怒如たるは九飯に垂ぎ 暑に当りて寒衣に厭く 歲月は  
將に暮れんと欲するに 如何ぞ辛苦して悲しむを 常に  
善しとするは粥をめぐむ者の心 深く念ふは袂を蒙ふの  
非なること 「嗟來」何ぞ吝ふに足らん 徒らに没して  
空しく自ら遣せるのみ 斯に濫るるは豈に志す攸ならん  
や 固窮は夙に歸する所なり 餒うるも也已んぬるかな  
在昔余に師多し

この詩のリアリティーを支えるものは、ひとつには序文の抑制された近況の記述であり、第二は詩本文の緊迫した抒情である。ここでのさし迫った飢餓体験の表現には虚構の入り交じわる余地を感じさせない切実さがある。「常善粥者心」以下四句の逆説的内容と、「孰敢」「何」「如何」「豈」と繰り返される反語や疑問、あるいは「已矣夫」という強い詠嘆によるたたみかけるような語調には、虚構の

設定といった心のゆとりからは縁遠い激越さがある。そしてこの言葉そのものの激しさがあるからこそ、詩人の「固窮」の気概は、万金の重さをもって人の心に迫るものとなるのである。飢寒に満たされた生涯のさいはてで直面した窮境のただ中であって、彼はなおより高い生き方を追求しようとする。彼にとっては無礼な仕うちで施しを受けることなど物の数ではない。忌むべきはこれまでの自身の生きざまにそむいて俗世間に迎合してゆくことである。現実には志をともにできる知己は存在しないけれど、自分にはさしいわいにも貧窮に徹して理想を貫いた、師と仰ぐべきいたの古人がいるではないか。

### 三

強靱なりアリティに貫かれた「怨詩楚調」詩と「有会而作」は、当然のこととしてそれらが現実の陶淵明の生活をありのままに写し取った作品だとして読まれてきた。古くから一般に定着している、後半生の淵明の生活が飢えと背中合わせの、極度の貧窮状態の中にあつたとする認識は、基本的にはこの二つの詩に基づくものだといっても過言ではない。しかしこれらをあらためて当時の淵明の交際関係やその交際の過程で作られた彼の他の作品と比較検討

してみるなら、これらの詩の内容がはたして事実そのままをうたったものがどうかは、問い直さなければならぬ問題になってくると思われるのである。

そのことを考えるうえで、ここでは淵明の五十歳代のかば以後、制作の時期をほぼ特定できる三つの詩を取りあげてみることにする。その一つは「於王撫軍座、送客」である。王撫軍とは、撫軍將軍と江州刺史を兼任する王弘を指す。『宋書』の武帝紀、王弘伝によれば、王弘が右の兩職に就いていたのは、東晋の義熙十四年（四一八）から、江州刺史のまま武官としての称号が衛將軍に進んだ劉宋王朝の永初三年（四二二）正月までの約四年間である。どころで一方『文選』巻二十には、謝瞻の「王撫軍・廆西陽集別。時為予章太守。廆被徵還。——王撫軍・廆西陽との集ひにて別る。時に予章太守たり。廆は徵めされて還る。」が載せられており、李公煥の『箋注』以来の「於王撫軍座」詩に対する諸注釈では、淵明と謝瞻の詩は同じ席で作られたものであるという解釈がおこなわれている。謝瞻は陳郡陽夏（今の河南省太康県）の謝氏という、両晋きつての名族の出身であり、謝靈運の族弟でもあった。謝瞻が予章（今の江西省南昌市）の太守に任ぜられたのは、本伝によれば、劉宋建国直後（永初元年・四二〇・六月以降）のこ

とであり、永初二年には任地で病没している。庾西陽とは庾登之、本伝に年時は明記されないが、東晋の末年西陽（今の湖北省黄冈県）太守となり、宋朝に入つて太子庶子、尚書左丞として建康に召還されたことが見えている。この王弘の主催する庾登之送別の宴に淵明も同席したとする諸家の解釈は、淵明および王、謝、庾の四名が宋の武帝劉裕の東晋鎮軍將軍時代（元興三年・四〇四・正月）義熙元年（四〇五・三月）、ともに參軍としてその配下に属した旧同僚の間柄であつたという点からも、蓋然性は極めて高いと思われる。ただ謝瞻の病床生活はかなり長期にわたつてゐることが本伝に記され、しかも淵明の詩の季節が晩秋であることを考慮に入れるなら、この宴席は通説にいわれるような永初二年ではなく、元年に持たれたものとみななければならぬであらう。時に淵明は五十六歳、王弘四十二歳、庾登之三十九歳、謝瞻は三十四歳であつた。「怨詩楚調」詩の制作に遅れること二年である。この折の淵明の作は、極めて沈痛、陰鬱なイメージと情感に満ちており、彼がその座の雰囲気に対して強い違和感を抱いていたことをうかがわせるものである。だがそうではあつても、国家権力の中核に深いかかわりを持つ、江州地方の最高級の官僚たちの公的な宴席に招かれて同座すること自体、淵明がそ

れにふさわしい社会的名声と当路の要人たちとの人間的つながりを保持していたという事実を物語っていることは確かである。<sup>(15)</sup>そしてそのような地方名士として、贅を尽くした江州刺史王弘の宴に席を占めている現実の淵明の姿と比較した時、痛切な貧困と飢餓の苦しみをうたう「怨詩楚調」詩の内容は、余りにかけ離れた異質の世界という印象を与えずにはおかぬものといえよう。

次に、年代の特定できる他の二作は、それぞれ四言、五言の「答龐參軍」である。制作時の状況を具体的に物語るのは、四言詩の次のような序である。「龐為衛軍參軍。従江陵使上都、過潯陽見贈。——龐は衛軍參軍たり。江陵より上都に使し、潯陽に過りて贈らる。」当時衛軍將軍の称号をもつて江陵に幕府を開いていたのは、謝瞻の弟の晦である。『宋書』の武帝紀、少帝紀、文帝紀、謝晦伝等によれば、謝晦は永初元年六月右衛將軍から中領將軍に昇任し、元嘉元年（四二四）八月には、即位して文帝となつた宜都王劉義隆のあとを受けて、撫軍將軍兼荊州刺史に任じ、更に八月中に称号を衛軍將軍に進めている。三十五歳という異例の若さであつた。この間武帝劉裕の死、徐羨之、傅亮、檀道濟、それに謝晦も加担しての少帝劉義符の弑殺、更に文帝の即位というように、宋朝の政局は目まぐるしく転回

している。そして結局は文帝によって徐羨之、傅亮、謝晦の順で誅滅されてゆく結末をたどることとなる。五言詩は江陵に赴任していった龐參軍への応答の詩、四言詩は半歳余を隔てての再会の折の作である。謝晦が檀道濟の軍によって討伐されるのが元嘉三年の正月であることから、五言詩は景平二年＝元嘉元年かもしくはその翌年の春、四言詩は同じそれぞれの年の冬によまれたと見なすことができ。淵明にあっては六十歳ないし六十一歳の年、「有会而作」も一般にはこの時期の作と推定されている。四言詩ではその終末部で、激動する時流に身を投じてゆく年若い友人の安否に対するしみじみとした心づかいがうたわれ、淵明の人柄のあたたかさがにじみ出ている。しかしここで特に注目したいのは、二つの詩の次のような表現である。

衡門之下 有琴有書 載彈載詠 爰得我娛 豈無他好  
樂是幽居 朝為灌園 夕偃蓬廬 衡門之下 琴有り  
書有り 載ち弾じ載ち詠じ 爰に我が娛しみを得たり  
豈に他の好きもの無からんや 樂しみは是れ幽居 朝に  
は為に園に灌ぎ 夕には蓬廬に偃す（四言・第一～四  
聯）

伊余懷人 欣德孜孜 我有旨酒 与汝樂之 乃陳好言  
乃著新詩 伊れ余が懷ふ人 徳を欣ぶこと孜孜たり  
我に旨酒有れば 乃ち好言を陳べ 乃ち新詩を著す（同  
・第九～十一聯）

有客賞我趣 每每顧林園 談諧無俗調 所說聖人篇 或  
有數斟酒 閑飲自欲然 客有り我が趣を賞し 毎々林  
園を顧みる 談諧ひて俗調無く 説く所は聖人の篇 或  
ひは數斟の酒有れば 閑飲して自ら欲然たり（五言・第  
二～四聯）

これらの詩句にあっては、數斟の酒を「閑飲」できるだけの暮しのゆとりを支えられた、満ちたりた超俗の思いが存分に語り尽くされている。この二つの詩においていささかパターン化して表現される隱士の閑居の明け暮れは、「有会而作」のあの厳しくさし迫った飢餓の状況の描写に比べると、まさに全く異質な穏かな明るさに包まれた世界である。両者を比べた時、それぞれが当時の淵明の生活の實際をどの程度に反映しているか、あるいはそれとどれ程の距離を有しているか、あらためて考えぬわけにゆかぬものがあると思われるのである。

そしてこのような比較対照の過程で問題点として浮かびあがってくるのは、「怨詩楚調」詩や「有会而作」などの貧窮詩のリアリティーは、実は虚構の上に実現されたものではなかったかということである。淵明の詩文において大きな比重を占める表現技法としての虚構について見るならば、「桃花源記」など本来虚構であることが明らかな作品ばかりではなく、「飲酒」二十首のように実生活に取材し、それに即しての感慨をうたおうとする場合にも、その中から虚構を踏まえた詩を拾い出すことは極めて容易である。だが更に強いリアリティーに支えられたこれら「怨詩楚調」詩、「有会而作」にあってさえ、右のように「於王撫軍座」詩および「答龐參軍」二首と比較対照した時に、作品の虚構性がたち表われてくることは、あらためて注目しななければならない点であろう。戸倉英美氏は虚構を操る天才淵明にあつては、田園生活を描く際にも、この見るからに何でもない日常生活の描写が一つの虚構だったのではな<sup>(16)</sup>いかという見方を提示されているが、従来の文人がほとんど顧みなかった貧窮や飢餓といった大胆な題材を繰り返し取りあげる過程にあつて、淵明が自身の実生活を踏まえながら、人間存在のぎりぎりの極限である飢餓体験を、虚構を通して表現しようという強い意欲を抱いたことは充分に

考えられるところである。

なお最後に触れておきたいのは、これらの詩が単なる貧窮や飢餓体験の表白に終わっていない点である。二首とも<sup>(17)</sup>窮極の目標は、精神の深みに根ざした飢餓感、欠亡感、より具体的には、みずからの真実を理解してくれる者の一人として存在しない荒涼たる孤独感をうたいあげようとしていることである。それは隠逸という行動様式によつてしか、思想の自由が保証されぬ、たとえようもなく暗く閉ざれた時代に生きる、知性ある士人の精神の極限的状况とも呼び得るものといえよう。二つの詩の終末部からは、その時の淵明の思いの暗さがまざまざと伝わってくることは確かである。

#### 注

- (1) 管見の限りでは、淵明が貧窮の中で常には「晏如」として過すことができなかったことを考察された峯吉正則氏の「陶淵明と貧窮」(国学院大学『漢文学会会報』第二十九輯・八六) 一篇があるだけである。
- (2) 曹操「善哉行」曹植「靈芝篇」「贈徐幹」阮瑀「隱士」阮籍「詠懷詩其七十三」嵇康「秋胡行其一」「同其二」
- (3) ①良才不隱世 江湖多賤貧(「与殷晋安」) ②駟馬無貴患 貧賤有交媿(「贈羊長史」) ③先師有遺訓 憂道不憂貧(「癸卯歲始春、懷古田舍」) ④貧居依稼穡 戮力東林隅(「丙辰歲八

- 月中、於下撰田舎履) ⑤貧居乏人工 灌木荒余宅 (飲酒其十五) ⑥子饑性嗜酒 家貧無由得 (同其十八) ⑦重華去我久 貧士世相尋 (詠貧士其三) ⑧安貧守賤者 自古有黔婁 (同其四) ⑨貧富常交戰 道勝無戚顏 (同其五) ⑩昔在黃子厓 彈冠佐名州 一朝辭吏席 清貧略難備 (同其七) (4) 傅玄「牆上難為趨」「雜詩其二」曹攢「贈韓德真」「感旧時」陸機「擬今日良宴會」王浚「從幸洛水、餞王公婦國詩」 (5) 曹風「候人」小雅「采薇」「雨無正」大雅「雲漢」「旻天」など。
- (6) ①瘡石不儲 飢寒交至 (勸農) ②飢來驅我去 不知竟何之 (乞食) ③谷風軋淒薄 春醪解飢飢 (和劉柴桑) ④夏日長抱飢 寒夜無被眠 (怨詩楚調、示龐主簿、鄧治中) ⑤飢者欲初飽 東帶候鳴鷄 (丙辰歲八月) ⑥九十行帶索 飢寒況當年 (飲酒其二) ⑦此行誰使然 似為飢所驅 (同其十) ⑧顏生稱為仁 采公言有道 屢空不獲年 長飢至於老 (同其十一) ⑨竟抱固窮節 飢寒飽所更 (同其十六) ⑩曠昔苦長飢 投耒去學仕 (同其十九) ⑪弱年逢家乏 老至更長飢 (有舍而作) ⑫飢食首陽薇 渴飲易水流 (擬古其八) ⑬量力守故箴 豈不寒與飢 (詠貧士其一) ⑭豈不寒 辛苦 所懼非飢寒 (同其六) ⑮年飢感仁妻 泣涕向我流 (同其七) ⑯臨沒告飢渴 當復何及哉 (說山海經其十三) (7) 陸機「苦寒行」「東武吟行」「猛虎行」「百年歌」陸雲「答兄平原」鄭豐「答陸子章其四」蘇伯玉妻「盤中詩」 (8) ①曠昔苦長飢 投耒去學仕 將養不得節 凍餒固纏已 (飲

- 酒其十九) ②餒也已矣夫 在昔余多師 (有舍而作) ③躬親未曾替 寒餒常糟糠 (雜詩其八) なお残る一例は民歌である清商曲辭「黃生曲其二」の次に示すようなものである。意味は解し得ないが、この「餒」はいわゆる「飢え」ではなく、何か別な言葉の仮借文字であるように見受けられる。——崔信榮、餒去多餒還 為欲復摧折 命生糸髮間。
- (9) 小論における淵明の生卒年は、六十三歳享年の通説に従い、その年譜は廖仲安著上田武訳注「陶淵明伝——中国におけるその人間像の形成過程」八七の記述に基づいている。
- (10) これらの点については拙稿「陶淵明の生活理念」(『日本中国学会報』第四十二集、九〇)を参照。
- (11) 王瑤『陶淵明集』五六、楊勇『陶淵明集校箋』七一、朱家馳『乞食賞析』(『陶淵明詩文賞析集』八六)、侯爵良、彭華生『陶淵明名篇賞析』八九など。
- (12) この詩についての詳密な分析として、一海知義「淵明の楽府」(『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』七四)がある。
- (13) 前掲「陶淵明の生活理念」でこの詩に対する若干の分析をこころみておいた。
- (14) 王、謝、庾の三名については、それぞれ本伝に記載が見える。淵明が劉裕の鎮軍參軍であったことは、拙稿「陶淵明」始作鎮軍參軍、經曲阿作「詩について」(『中国文化』第四十三号、八五)を参照。

(15) 石川忠久「陶淵明の隱逸について」(『日本中国学会報』第十七集・六五)では、隱士淵明の生活の輪郭が的確に跡づけられているが、そこでは淵明が周統之などと並んで潯陽周辺にあっては王朝公認の著名な隱士として、地域の高級官僚とも深く交わり、特に王弘、顔延之と特別なつながりを持っていたことが指摘されている。

(16) 戸倉英美『詩人たちの時空』Ⅱ漢魏六朝詩の空間表現 第六章 陶淵明 空間の変化、八八。

(埼玉短期大学)